

えよう。また、強いて三十九段の引用と考えなくとも、本文は「春の明ほのならねど……」とあるから、三十五段に見えるように、春な

ていたが、流布本のみが有する個所に心理描写が見られるから、成立時期を下げることはできないと思われる。

岩波本は表現が詳細なため注釈的性格をもつが、流布本に省略の性格があり、梗概本となつていゝとは考えられない。表現においても流布本がすぐれていると思ふ個所がある。以上の事から流布本がもと本に近いと思われる。第四系統である流布本がもと本に近く、第一系統である岩波本は、流布本より後のものであり、後人による書き添えなどが行われた結果によつて生じたものと思われる。

## 菅原道真の詩と性格

——白楽天との比較より——

椋 島 靖 子

はじめに

道真ほど、この日本の歴史を通じて、人々に広く親しまれ敬せられて来た人は少い。にもかかわらず、今日まで彼の詩は、或る特定の二、三篇を除いては殆んど知られていない。また性格についても

同様、理想化された、偶像としての道真があるのみである。文学史上に於いては、平安朝国風文化の先駆けをなした彼であるが、伝説的天神崇拜の域を出て、人間道真とその文学を直視する科学的見地に立つた研究が、いまだに殆んどなされていないということは、誠

に驚くべきことである。よつて本稿は彼の遺文、及び當時を風靡した「白氏文集」との関連より、或いはその他の他の文献を通して、道真の人物、性格乃至は人間性を究明しようと試みたものである。

本論

(1)、「菅家後集」詞句出典

元慶七年、道真が朝廷の命をうけて、渤海入観の大使と唱和した時、大使は、

礼部侍郎、得白氏之体（文章卷第二「余近叙詩情怨一篇」と言つたという。また「江談抄」には「呈菅十一著作郎」傍注）

菅家の御作は眼も及ばず、文集は眼及ぶと両作を比較し、「見三右丞相献三家集」（後集）でも、天皇は道真の献上した「菅家文草」を賞して、

更有菅家勝白様、從茲拋匣塵深

と、同じく両者を比較して見ている。これから考えると、道真の詩が白楽天に似ていることは既に當時から定評があつたらしい。が、今日まで、そういう評のみ伝わつて、その実二者がいかなる点に於いて類似しているか、またいかなる関連状態にあるかは殆んど明らかにされていない。もつとも「大鏡時平伝」では、昌泰三年作「不出門」中の「都府楼纔看瓦色、観音寺只聴鐘声」をとつて、

これは文集の白居易の「遺愛寺鐘欵枕聴、香炬峯雪撥簾看」といふ詩に、まささまに令作給へりところ、むかしの博士ども申しけれ……

と記しており、「都府楼纔看瓦色……」が、白楽天の「香炬峯下、新下山居、草堂初成、偶題東壁、重題」中の一節より引用した句で

あることを述べているが、右のこの一句の引用関係以外は殆んど知られていないように感ずる。よつて、最近発刊された「日本古典文学大系」（川口久雄著）を参照して、「白氏文集」を典拠としたもの、それと擬せられるもの、或いは関係があるのではないかと思われるものを掲げると次のようになる。

後集 詩題	菅家後集	白氏文集
○自詠 読楽天 北窓三友詩	万事皆如夢。 官舎三間白茅茅	廻思往事紛如夢。 <small>（枕上作詩）</small> 五架三間新草堂。 <small>（香炬峯下山居草堂詩）</small> 三間茅舎 <small>（別草堂其二）</small> 官舎黃茅屋 <small>（代書詩一百）</small> 適性遂其生、時哉山梁雉 <small>（山雉）</small>
不出門	燕雀殊種遂生一 侍中含香忽下殿 提印。	一提支那印。 <small>（同微之贈別郭虚舟詩）</small> 对秉鵝毛筆俱含鵝舌香。 <small>（渭村退居一百韻）</small> 不出門。 <small>（卷二十七七律）</small> 徐步出柴荆。 <small>（秋遊原上）</small>
読開元 詔書	鯨鯢……吞舟非我口。	撥簾看。 <small>（香炬峯下山居草堂）</small> 鯨鯢得其便張口欲吞舟。 <small>（題海函屏風）</small>

と記しており、一部府椽續差瓦色……」カ 白茅の一葉を……  
 新下山居、草堂初成、偶題東壁、重題」中の一節より引用した句で

詠書

(嵯海区扇風)

閑旅雁

九月九日  
口号

叙意一百  
韻

秋夜

旅雁 欵枕思量歸去日 合眼。独愁臥	旅雁詩 (旅雁詩) 遺愛寺鐘欵枕聽 (香炉峯下) 春來夢何處、合眼到東州 (山居草堂) 酬夢得以予五月長。齊延僧徒 絕貧友見戲十韻 (寄行西詩) 其道直如弦 (孔射) 望闕之恋、深固難奪志 (与二崇文一詔)	宛然開小闕 村翁談往事 移從空官舍 斑藟石孤拳 才能終蹇剥	小闕重裘不怕寒 (香炉峯) 廻思往事紛如夢 (枕上作) 官舍黃茅屋 (代書詩一百韻) 百仞一拳 (太湖石記) 一旦蹇剥、來佐江郡 (白氏草堂記)	富貴本迤邐 遇境。虚生白 掃室。安懸磬 璨々黃茅屋	理合命迤邐 (江樓夜吟) 心與遇境。發、自力因行知 (秋遊平原) 貧室如懸磬 (東南行一百韻) 官舍黃茅屋、人家苦竹籬 (代書詩一百韻寄微之)	昔被采花簪組縛今為貶謫草 潦倒翁 (晏坐閑吟)
-------------------------	---	---	--	------------------------------------	--	----------------------------

風氣如刀 此秋独作我身秋 分憂 官長有剛腸	傷毀 我劇泥沙委 腸九轉 山青反照前 響聾牙米鏡	東山小雪 白微霰 歲日感懷 題竹床子 草堂	傷野大夫 詩人亦歎道荒蕪 沈思雖非入神妙 絕而不繼 背壁微燈。夢不成	官舍幽趣 遇境。閑	傷風利如刀 秋來只為一人長 (燕子樓) 分憂。固是榮 平生剛腸內、直氣掃其間 (孔射詩)	鄙賤劇泥沙 悶結九迴腸 碧愛新晴後、明宣反照中 祿米聾牙縮、園蔬鴨脚葵 (窓中列遠岫) 灰。心罷激昂 坐倚繩牀間自念 香炉峯下、新下山居草堂初成…… 僕嘗 若妙。与神、則吾…… (劉白唱和集序) 清風無人繼 (遊襄陽憶五浩) 耿耿殘燈。背壁影 (上陽白) 林下幽。閑。氣味深
--------------------------------	--------------------------------------	-----------------------------------	--	--------------	---	--

右表について検討するに、わずか「菅家後集」三十九首を挙げたに過ぎないが、「白氏文集」に関連あると思われる多数の詞句を検出することが出来る。尚、右表中、上段に○印を記した詞句は川口氏の「日本古典文学大系」には記されていないが、私の見る所、やはり「白氏文集」に関連あるのではないかと思われるものである。次にそれらの詞句について検討をする。

先ず「叙意一百韻」中に検出される「小閑」については、「叙意一百韻」が「白氏文集」中の詩に、形式、内容の両面に於いて多大なる影響をうけていること（卒論・第三章、「叙意一百韻」に詳述本稿では省略）、またその住居描写は同「文集」中の「香炉峯下云々詩」中の住居描写に非常によく似ていること（後述）。偶々この「小閑」なる語は、その「香炉峯下云々詩」中に見られる詞句であることなどより、やはり偶然に用いられた詞句とのみは言い難く、むしろ「白氏文集」を読んで得た詞句が、自然に乃至は無意識のうちに出て来たものと見るべきである。

次に「秋夜」（後集）中の「昔被榮花簪組縛、今為貶謫草萊囚」と「晏坐聞吟」（白氏文集）中の「昔為京洛声華客、今作江湖潦倒翁」については、両作がともに謫所で詠まれた詩であり、道真は楽天の詩篇中、特に謫居中の詩を愛読していたこと（後述）、また詞句こそ違え、その言わんとする内容は二者とも全く同一事象であること、すなわち、昔、都で榮華を極めた己と、現在の流謫の身とを対比的に叙していることなどを考えると、これもまた少からず白楽天の影響をうけているものと見てよいであろう。従つてこれらの詞句も右表に加えることとした。

今、右表の詞句を一々取り上げて吟味検討することは紙面の関係

上出来ないが、勿論そのすべてが「白氏文集」に拠つたとは言いがたいであろう。中には道真自身の語であつたことも考えられる。しかし仮にそうだとしても、中国の書籍より得た知識、或いは詞句の潜在なくしてそれらが生れ得ることは恐らく不可能なことであろう。とすれば右表の如き詞句を単なる偶然とのみすることは出来ない。殊に「枕草子」にも、

文は文集、文選、はかせの申文……

とあるように、「白氏文集」が當時を風靡した詩集であつてみればなお更、「白氏文集」の投影は強大なものであつたと考えられる。以上より道真が白楽天に影響をうけ、心を傾けていたことは疑いなしと思われる。

## (2) 「不出門」其他

上述のように、道真が白楽天に傾倒していたことは殆んど疑うべくもない。それでは一体いかなる理由によるのか。前述のように當時の風潮として「白氏文集」が必読の書であつたことにもよるうがそれ以上に彼の心を捕えて離さないものがあつたのに違いない。それは同境遇ということではなかつたか。

周知の通り白楽天は、元和十年、四十四歳の時江州司馬に左遷されている。これに対し道真も五十七歳の時太宰府に貶せられている。もつとも道真については前の讚州赴任をも左遷と見る向があるが<sup>進三</sup>辻善之助氏の言われる通り単なる普通の官歴とみるのが自然であろう。しかし、赴任に當つて、

讚州刺史自然悲、悲倍以言贈我時（文章卷第三）  
（「尚書左丞錢席」）と叙し、  
讚州赴任を悲しんでいることや、

我將南海飽風煙、更妬他人道左遷（「文章卷第三」）とあることを始めとして、讚州時代の詩の殆んどが、都で詠んだ詩と内容を異にし、むしろ太宰府謫居時代の心境に近いことを考え合せると、少くとも道真自身は当時、左遷と思つていたに相違ない。

要するに、同境遇にあるということとは道真にとつては、詩人としてのみならず人間として白楽天に関心を示す一大動機となつたのである。謫所に在つて道真が以前にもまして白楽天に馴染んだことはいうまでもない。殊に、同病相哀れむという心理は、白氏の謫居に於ける詩に集中したことであろう。道真が楽天のその謫居中の詩の中でも特に「香炉峯下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁」の詩を愛誦していたことは、この「不出門」に限らず、先の讚州謫居時代（以後道真の主観的立場より讚州時代を讚州謫居時代と呼ぶ）の「閑居」（「文章卷第四」）、更に「不出門」より五篇後に記されている「叙意一百韻」の中、またその地でも「香炉峯下云々詩」類似の住居描写が出て来ることより推測出来る。今それらを二、三掲げてみる。

閑居	茅屋三間竹数竿	白氏文集（香炉峯下云々詩）
不出門	便宜依水此生安 疎畦種黍纜取得 都府樓纜看瓦色 觀音寺只聽鐘聲	五架三間新草堂 石階柱竹編牆……弘臆斜 竹不成行 一带山泉遶舍廻 菓園茶園為產業 遺愛寺鐘欲枕聽 香炉峯雪撥簾看 五架三間新草堂 石階柱竹編牆
叙意一百韻	疎割竹編	

右表について検討するに、道真是偶然、右の如き詞句をもつて己の住居の情景、状態を描写したのではなく、讚州謫居に於いても、西府謫居に於いても、彼の念頭には常に白楽天の謫所草堂があつたことは疑えない。これは配所に在つて、楽天の草堂自体に憧れをもつと共に、その草堂でやはり同様に配所の月日を過した白楽天の悠然たる心境に多大の共感を抱いたからではないか。「不出門」中の引用部分「都府樓看瓦色、觀音寺聽鐘聲」は、恐らく、このような心理状態の中に、自然生じたものと思う。

ところで白楽天は内心はともあれ、表面的には謫居の心境を「晝寢」（「文集卷十七」）と題して、

軛枕重安寢、回頭一欠伸、紙窗明覺曉、布被煖知春……雞鳴猶獨睡、不博早朝人

と詠み、朝寢の出来る謫居の身の気楽さを喜んでゐる。「香炉峯下云々詩」もこれと全く同心境を詠んだものであり、

日高睡足猶慵起、小閣重衾不怕寒

遺愛寺鐘欲枕聽、香炉峯雪撥簾看

匡廬便是逃名地、司馬仍為送老官

心泰身寧是歸處、故鄉何獨在長安

日は高くのぼり、睡眠は十分とつたが、まだ起るにはめんどうくさい。中二階で幾重かのかけ布団と言えは寒くもない。遺愛寺

でつく鐘の音は寢たまま枕を持ち上げて聞き、香炉峰の雪は簾を

はね上げて見る。ここは名譽心からの逃避所であり、司馬という

つまらぬ官職も隠居にはなかなかよい。心身の安らかであること

こそ、人間本来の安住の地、長安ばかりが都ではない。

と、楽天の悠然たる態度、大陸的な太さが感じられる。しかるに一

方道真は、いづれもその心境、悲痛を極めてゐる。大宰府謫居にあつては特にその感が強い。例えば、

春夜漏非長、春雨氣応暖、自然多愁者

時令如乖狼、心寒雨又寒、不眠夜不短

失膏槁我骨、添淚洗吾眼：（「後集」「雨夜」）

の如く、悲しみの為、夜も眠れないことを叙している。「菅家後集」にはそのような大宰府謫居の悲、愁、怒の他、無実の主張、望郷妻子への思慕、生活苦、老苦、病苦等、あらゆる苦病を訴えており終に悟ることの出来なかつた人間道真の姿がありありとうかがえる。これは又、花鳥風月を詠む場合にも同様に現われており、一つとして自己の心境、悲哀を詠みこんでいないものはない。例えば、梅の花を詠むにしても、

宣風坊北新栽処、仁寿殿西内宴時、

人是同人梅異樹、知花独笑我多悲（「後集」「梅花」）

と、その心中の悲しみを梅花にことよせて詠み、雁を詠むにしても、我為遷客汝來賓、共是蕭々旅漂身、欲枕思量婦去日、我知何歲汝明春（後集「聞旅雁」）と都へ思いを馳せ、雁自身を、或いは梅自身を詠むのではなく、自己の心中を詠まんが為に「梅」または「雁」を引き合いに出したという感がする程である。これは貶謫以前の詩、すなわち都で詠んだ詩と大きく異つてゐる点である。都に於いては同じ梅を詠む場合、

月耀如晴雪、梅花似照星

可憐金鏡轉、庭上玉房聲（「文章卷第一」「梅花」）

のように、純粹に梅花の美しさを詠んでいる。雁の場合も、

稚羽晚鴻賓、寒聲驚鳳哀、帛書誰保足

黄口自衝尾、畏月是孤弦、渡江非一輩  
先鳴何処客、在後時元幾（「文章卷第一」「九日待宴、同賦鴻雁來賓」）

と、雁自身についての感想を述べてゐる。自己の心境を叙べる為に「梅」や「雁」を用いたという感は全く無い。これらの現象は、梅雁に限らず、月、雨、その他殆んどのものに対して言えることである。本題「不出門」についても同様である。

一從謫落在柴荆、万死兢々踟躕情

都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲

中懷好逐孤雲去、外物直逢滿月迎

此地雖身檢繫無、何為寸步出門行

一度、左遷されて、配所に移つてからは、怖れおののき、恐懼謹讓の日を送つてゐる。都府樓はただ屋根瓦を望むだけ、觀音寺は唯鐘の音を聞くだけ、心の中はちぎれ雲とともに去り、空虚であるが、ままそれでよい。私をめぐる外界は規則正しくめぐり合つて、満月を迎える。この地では窮屈な束縛はうけていないが、門を出て一歩も歩き出す気にはならない。

もつとも「不出門」は、謫居の悲哀感傷にみちた詩篇中では、いくらかその苦悩を超越しようとした形跡が認められる。それは彼が「不出門」に「香炉峯下云々詩」（文集）を引用する時、同時に一時的にでもその心境、すなわち「香炉峯下云々詩」の尾聯「心泰身寧是婦処、故郷何独在長安」が示すような楽天の諦観、或いは達観した境地に近づくことを欲したからに相違ない。にもかかわらず、兩作品を比較した場合、「不出門」にはやはり少なからぬ不安定な心境を感じずにはいられない。その感情が主として起聯の「一從謫落在柴荆、万死兢々踟躕情」と尾聯の「此地雖身無檢繫、何為寸步出

門行」から来るものであり、その二聯が道真の性格的なものを内に含んでいることを考えると、謫居中の詩が、悲哀、苦痛に満ちているのは、彼の性格から来るものであることは明確である。

ここに、道真の性格について少しく述べる必要を感じる。

算克彦博士は、道真の人物を評して、事実上の現人たる方面より批判するを以つてしても猶、公は偉聖であると絶賛しておられる。が、戦前に於ける数少い道真の研究書がほとんどこの傾向にあることは否めない。従つてここに、新たな検討を加えてみることにする。

道真は元慶四年、大学学生の教授をやつた時、周田の誹謗に対する憂悩を

南面纔三日、耳聞誹謗声（文章卷第二）  
「博士難」

と嘆き、次に自己を弁明して、

今年修善牒、取捨甚分明、無才先捨者、讒口訴虚名、教授我無失  
選挙我有平（同「博士難」）

と訴えている。又同六年夏末に、匿名の詩を作つて藤納言を誹るものがあり、藤納言はその詩が凡庸でないことより道真を疑つたといふので

雖云内顧而不病、不知我者謂我癡、何人口上將銷骨、何処路隅欲  
僵屍（文章卷第二）  
「有所思」

と、七言古詩でもつて延々と己を弁じている。更に翌七年には、渤海使節が来朝した節、朝廷より命をうけて唱和した詩が拙であつたと誹る者に対し、その嘲を解いて、

去歳世驚作詩巧、今年人誘作詩拙……惡我偏謂之儒翰、去歳世驚  
自然絶、呵我終為実落書、今年人誘非真説（文章卷第二）  
「詩情怨」

と叙し、後にはこれらの事件を苦にして出家を思いたつたと述懐し

ている。

以上三詩より見るに、必ずしも道真を寛厚なる人物とはし難い。世の毀譽褒貶に一喜一憂し、弁明し、果ては出家まで考へるのは、むしろ、神経質な性格の一端と小心の程を示すものである。また一方、名譽への欲心が全く無かつたとも言ひ難い。散文「書齊記」  
（巻第七）は道真の書齊の状態を記したものであるが、熟生や朋友の行動を詳細に記して、己の学問の妨げとなることを歎いている。例へば、熟生中、刀筆を弄ぶ者に対し、

刀筆者写レ書刊レ謬之具也、至三千鳥合之衆、不レ知三其物之用、  
操レ刀則削二凡案一、弄レ筆忽汚一穢書籍一

と嘆き、書齊の中に乱りにはいつて来る者に対しては「其心難察」と非難している。また朋友の訪問に対しても同様にその無礼を、

朋友之中、頗有二要須之人。適依レ有レ用、入在二簾中一、闖入者不レ審二先入之有レ用、直容レ後來之不レ要、亦何可悲

と悲嘆している。ここに於いて道真が、融通性のない神経質な性格であつたことは明らかである。

次に交友關係についてみるに、同「書齊記」に

唯知レ我者、有二其人三詩人一

とあることより推測すると、親密な交友關係を結んだ人は極めて少数であつたらしい。「菅家文章」中の詩に見える応酬贈答の作を見ても、岳文島田忠臣と紀長谷雄の他には僅か数人が見られる程度である。当時有名だつた儒家に、都良香、橘広相、三善清行、藤原佐理、大藏善行等がいるが、これらの者と交友關係は作品の上には全く見られない。三善清行の如きはむしろ道真の反対者であつたらしい。「大日本史」百三十五「三善清行」では左の如き道真に関する二つの記

事を載せている。

清行受<sub>二</sub>学於菅原是善<sub>一</sub>。後師<sub>二</sub>巨勢文雄<sub>一</sub>。…文雄薦<sub>二</sub>清行<sub>一</sub>曰。才学超<sub>二</sub>越時輩<sub>一</sub>。菅家道真聞而晒<sub>レ</sub>之。以下其背<sub>二</sub>是善<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>中文雄上<sub>一</sub>也。(江談抄)

時右大臣菅原道真、権寵隆盛、清行勸<sub>二</sub>之退避<sub>一</sub>。道真不<sub>レ</sub>納。乃以<sub>レ</sub>書諫曰…。道真不<sub>レ</sub>晒。遂逐<sub>二</sub>貶謫<sub>一</sub>。(扶桑略記、文粹、一) 統古事談

勿論、これらの記事をそのまま信用することは出来かねる。前者に於ける「晒」を、必ずしも筆者が述べているように、清行が道真の父是善の門下を去つて巨勢文雄に師事した為とは言ひ難いからである。或いは清行の学問自体が外見程でないことを晒つたのだと言えないこともない。それに「晒」という語を用いたこと自体に不明瞭な点がある。第三者が道真の表情からそれをよみ取つたと取るべきか、それとも道真自身が「晒」に相当する語を発したのか。第三者の判断とした場合、そこに主観性が介入する為、事態は一層不明瞭とならざるを得ない。従つてこの記事だけでは筆者の「以其背是善云々」を信じてしまうわけにはゆかない。が、いづれにせよ周囲にそれと感ぜさせるものが道真の内部にあつたと見ることは異論はないであろう。しかし後者の、道真が清行の勸告を納れなかつたとあるについては、明らかに清行への対抗意識が感じられる。

又一方、藤原菅根は道真によつて大内記に推薦された恩ある身であるにもかかわらず、後、時平の徒となつて道真を讒している。これは、

菅根郷むかし藏人頭にてありしに、庚申の夜の御遊につらうたれたてまへりけるうらみの深さに…。(北野縁起上)

とある通り、道真に辱められたことに起因している。朋友が少く反

対者が多いということは文人社会という学閥抗争の激しい中では、道真独りに限らず当然のことかも知れない。が、そこにはやはり性格的なものを認めないではいられない。

以上でも知れる通り、人を許容することの出来ない一徹な性格は自然、朋友を遠ざかしむるに至つたのである。高山樗牛は道真の性格を評して

公の人たる察々の明あり、切々の直あり、而かも清濁並せ吞み、若しくは温雅、人を容るるの器に非ざりし…公をもつて廉直細心、人の悪を仮借せざる人となすは可なり。と言つているが、全くその通りである。

道真の讃岐赴任の際、前讃岐守藤原保則は新太守当今碩儒、非吾所測知也、但見其内心、誠是危殆之士也(藤原保則伝)と言つたという。「危殆之士」がいかなることを意味しているから明らかではないが、樗牛は、

「見其内心云々」とは公が昂然として人に下らず名譽心の甚だ熾なるを看取して是を諷せしには非ざる乎

と述べている。「名譽心の甚だ熾なる」については少々酷評の感もある。又この「藤原保則伝」が前述の三善清行著であることを考えるとその記事の真偽の程も少々疑しい。しかし、少くとも類似したことを言つたのには相違なからう。ただ保則は賢明にして人を知る君子である。その彼が新太守を名譽心云々と誹るとは考えられない。従つてここは「その気性を見るに非常にあやうい生き方をする人だ」の意と取るべきで、道真の廉直なるが故に狭量にして、容易に人を容れようとはしない性格、乃至はそれによる世間の誤解、恨みまた忠誠への一貫な性格等を考え合わせたものと見るべきである



要するに彼は、自己を偽ることなく己の心に忠実な性格であつたのである。

道真は右大臣まで上つた偉大な政治家でもあるが、以上の如き言動を考え合せると、正に詩人肌の人間というべきで、政治家肌とは言い難い。川口久雄氏は

ハムレット型の詩人的気質を感じさせる。より少く現実的実践的であり、より多く理想主義的である。といわれているが全くその通りである。

### 結 び

以上、道真の詩、その他の文献及び白楽天の詩との対比に於いて道真の性格に一考察を試みたが、今までの天神、偉聖としての先入感を全く取り去らねばならないことに気づくであらう。

人間としての道真は、融通性無く、神経質な性格と言える。従つて人を許容する寛容さに欠ける。しかし一面、感受性が強く、思索的で詩人型、学者型というべきである。

道真が楽天に傾倒していたことは疑うべくもなく、「白氏文集」を太宰府謫所まで携行したのもそれ故である。彼は楽天の謫所生活態度を学ぼうとしたのに違いない。にもかかわらず、前述の「不出門」と「香炉峰下云々詩」との対比に於いても明かな如く道真は白楽天の現実的、理性的、開放的な要素に対し、理想的、感情的且つ閉鎖的と、対照的相違を示している。その他、紙面の関係上、本稿では省略するが、例えば「叙意一百韻」と「東南行一百韻」とを比べても全く同様なことがいえるし、或いはまた「北窓三友詩」に於いては終には楽天の性格の或る一面に強い批判さえ表している事も

指摘できる。これらのことは、道真が楽天に傾倒することいかに大であつても、所詮、楽天にはなりきることの出来ない本質的な相違を示すものである。

### 注

①川口久雄氏「菅家文章、菅家後集」（日本古典文学大系72）（昭和四十一年十月刊、岩波書店）

②寛克彦氏「菅公頌徳録」（昭和十九年刊、北野神社編）所収（菅公の性格について）

③辻善之助氏「菅公頌徳録」（昭和十九年刊、北野神社編）所収「菅公の性格について」

④高山樗牛「樗牛全集、第三卷」（明治三十八年刊、博文館）「菅公伝」